

ACE 北海道支部ではさっぽろ雪まつりを大きな活動の場として、実行委員会公式ホームページの制作受託など様々な取り組みを行っています。その中のひとつ「バーチャル雪まつり」が先日、実際の雪像制作を終えて今年度の活動を締めくくりました。また、雪まつり会期中に様々なイベントを速報する「デジタル雪まつり新聞」が今年も計4号の発行で大変好評を博しました。水越・野口両代表に、今年の取り組みを振り返ってもらっています。

VSF1999 を振りかえって

バーチャル雪まつり代表 水越 洋

第4回目のバーチャル雪まつりも先日2月11日、第50回さっぽろ雪まつりの最終日とともに、無事終了しました。1月30日、31日の雪像制作には、のべ100人を超える多くの児童・生徒たちが雪像作りに参加しました。今年の雪像は例年よりも大きい雪の塊(幅6メートル、高さ3メートル、奥行き3メートル)であったにもかかわらず、2日間でほぼすべての作業がおわりました。去年経験している子供達もいたおかげで、作業がスムーズであったのはいうまでもありません。



制作前。ほとんど途方に暮れますよ、これを前にすると。

今年の子供達の動きは、本当にすばらしかったのひとことです。毎度のことながら思うのですが、制作初日にあのどでかい雪の塊と対面するときは、「ほんまにできるのかいな?」とかならず思います。しかし、その不安もなんのその、子供達がどっと押し寄せて、一気に作業を進めていくうちに怒涛のように出来ていくではありませんか。「2日間で作りたい!」という大人達の願いが通じているのかどうか分かりませんでしたが、とにかく黙々と作業をする子供達の連携プレーを見て、小学生と中学生だけでもここまでやれるのかと思ったのです。

子供達同士の役割分担もみごとでした。雪を削る人、削った雪をかたづける人。水を運ぶ人、きれいな雪を持ってきて水の中に入れてシャーベットを作る人。そして、そのシャーベットを雪像の上で作業している人に渡す。一つ一つは簡単な仕事でも、多くの人数がかかわっている作業では、良いチームプレーが功を奏したわけです。雪像制作までに行った2回のオフライン・ミーティングもこの日のために良かったのではないかと思います。

バーチャル雪まつりは、インターネットを通して行うコラボレーション・アート・プロジェクトですが、参加者全員がインター



だいぶ出来てきました。細かい仕上げをみんなで協力してやっています。

ネットやパソコンの使用において、満足のいく環境があるわけではありませんし、それが現実であるのです。いろいろな条件の元でそれぞれの参加の仕方を考え、いかにコラボレーションしていけるかがこのプロジェクトの工夫のしどころでもあります。出口のない思考錯誤のもとに新しい形のコラボレーションが生まれていくことを期待しながら、次回のVSF2000への始まりを作っていたらと思います。

バーチャル雪まつりに参加した子供も大人も、「雪まつりを見るより作るほうが楽しい!」と同じ気持ちを持つのは、やはり自分で何かをすることのすばらしさを知っているからですね。「まつり」はこうじゃなきゃいかんです。

バーチャル雪まつりのWebは <http://www.miceng.co.jp/VSF1999/> です。制作途中の経過やこどもたちの感想などもアップされています。また、今年の活動全体をビデオにまとめている途中ですので、ご希望のある方にはおわけできると思います。

そして、このURLに/VSF2000/のディレクトリが出来るときが来年度の活動の始まり?です。さあ、あなたもこの取り組みに参加してみませんか?

1999 バーチャル雪まつり

主催

さっぽろ雪まつり実行委員会

バーチャル雪まつり 1999 実行委員会

主管

教育とコンピュータ利用研究会(ACE)北海道支部

後援

財団法人コンピュータ教育開発センター

協力企業・団体

(株)経営情報センター

ネットワークコミュニティフォーラム(NCF)98

北海道放送

北海道新聞社

NTT北海道移動通信網

(株)道新メディック
北海道こねっと事務局



完成了ました。集合写真です。

有限会社ラプト
ティーズ・アート・ワークス
有限会社ダーフレックス

参加校

東京都北区立赤羽台西小学校
札幌市立開成小学校
札幌市立平岡小学校
札幌市立発寒西小学校
札幌市立発寒中学校
札幌市立啓明中学校
札幌市立福井野中学校
札幌市立北野台中学校
千歳市立青葉中学校
北海道大成高等学校
浦河町立浦河第一中学校
北広島の子供達有志
北星学園女子短期大学
造形教室アトリエアイリス

以上のみなさまに参加、ご協力をいただきました。ありがとうございました。来年はどんな風にパワーアップするか、ご期待ください。

「デジタル雪まつり新聞」 総括

道都大学短期大学部 野口光孝
(nogu@netfarm.ne.jp mnoguchi@dohito.ac.jp)

昨年に引き続き2度目の新聞制作を行いました。つい数日前に打ち上げを終えたばかりのほやほや状態で、記憶も鮮明な今、このイベントを振り返ってみようと思います。

デジタル雪まつり新聞は、さっぽろ雪まつり実行委員会主催の公式行事です。高校生、大学生からなる新聞作成チームにより、取材から編集、制作の一連の作業を行います。取材はインタビューとデジタルカメラによる撮影が中心で、その後は北海道新聞情報開発本部の一室をお借りして編集作業に入ります。

原稿書きが終わったものからどんどんデジタルのテキストデータにしていき、その後 Adobe 社の PageMaker により新聞としての体裁を整えていきます。完成した新聞は印刷物として発行するほかに、PDF

(Portable Document Format)というファイル形式に変換してインターネット上に配信するのです。このファイルは同じ Adobe 社の AcrobatReader により閲覧することができます。PDF を使ったドキュメント配信は、その文字の美しさからインターネット上で現在盛んに使われている技術です。

さて、昨年は札幌星園高校のベテラン成田君を中心に初めての体験だらけだった道都

チームでしたが、今年はその経験を生かし自ら中心となって任務を全うするという大事な立場を与えられました。デジタル雪まつり新聞編集部メンバーは全部で11名。道都大学からは、編集長として全体の統括にあたった今回2回目の参加となる情報処理研究部部長の中原君。同じく去年も参加し、昨年の熊本 POEM で中原君と共に「デジタル新聞」の発表を行ったマルチメディア研究部部長の射水さん。彼女は取材部門チーフとして彼をサポートしました。そのほか昨年の大学祭でデジタル新聞作りを経験した美術学部の学生など総勢7名が参加しました。さらに制作部門には旭ヶ丘高校新聞局の小田君、長谷川君、光星中学校3年の辻下君が、そして取材部門には通訳として北星女子短大OGの林さんが参加し、年齢も立場も違う仲間による、楽しくかつ、にぎやかなプロジェクトチームが結成されました。

今回は第50回という節目の年でもあり、雪まつり期間中には恒例となった国際雪像コンクールをはじめとして、バーチャル雪まつり、花火大会、コンサート等の催し物が目白押しでした。しかしながら雪まつり開始前の数回のミーティングにおいて、「今年は無理をしないスケジュールでいこう」という青柳、吉田



第1号。富士ゼロックス北海道支店様のご協力で、全号フルカラーで発行できました。多謝。



道新にも載りました。毎年同じにならないよう工夫してるみたい。

両氏からのアドバイスを受け、全体として3回の発行を目指しました。2日に1号のペースです。昨年は編集作業に夜の11時を過ぎることもあり、なかなか余裕を持った作業ができないという反省がありました。今回の方針によりそれは改善されたようです。結局、彼らは号外を含む全4号を発行するに至りました。

さて、新聞作りにはいろいろな教育効果があります。表現力の育成、文章力の養成。デジタル新聞作りを振り返ると、そこにはさらにテクノロジー利用法の理解向上などもあるといえます。そしてなんとと言っても、コラボレーションを通して社会観を熟成していくことのできるおもしろさがあるのではないのでしょうか。その意味で、今後もチャンスがある限りデジタル新



取材風景。リラックスした姿を捕らえることが出来るのも彼らならではの。聞作りに関わっていきたくて考えています。最後になりましたが、いろいろお世話になったACE北海道支部のみなさん、北海道新聞のみなさん本当にありがとうございました。なお、デジタル雪まつり新聞は以下のURLでご覧になれます。

<http://www.aurora-net.or.jp/snowfes/99/pdf/>

雪まつり Web

～ 何でオラたちこんなに働くだ～

事務局 吉田

さて、代表的な二つをご紹介しましたが、このほかにもいろいろと雪まつりでは取り組みを行いました。

ライブカメラ LINK!

昨年はドコモさんの協力で四苦八苦しながらライブカメラに取り組んだ我々ですが、今回はソフトもバージョンアップ、かゆいところに手の届く仕様になりましたので、メビウスノートで専用ソフトを走らせながらフリーのhttpdを立ち上げて一発制御することが出来ました。我ながら成長の跡が見られる、という感じです。

しかしながら、それだけではもったいないので実行委員会に呼びかけ、雪まつり会期中にライブカメラを立ち上げている放送局などと協力しながらライブカメラとVRオブジェクトのリンク集を作り、アクセスしてきた人が一覧できるような形にしました。<http://www.aurora-net.or.jp/snowfes/99/webmap/index.html>

この中には、バーチャル雪まつりの雪像を写していただいているHBC北海道放送さんのカメラや、360度球状のパノラマを見ることが出来るI-Pixsを使ったSTV札幌テレビ放送さんのページがリンクされていて、オブジェクト類は会期終了後のいまでも見ることが出来ます。

このページ、ライブカメラのリンク集で有名な「世界の窓」<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/hiroshi1/cam.htm>にリンクしていただいたところ、爆発的なアクセス数でビックリ、という状況になりました。やはり雪まつりのイベント性と、ライブカメラそのものの注目度、というのは相当なものです。



こういう形でやったわけですよ。

国際雪像コンクール

さらに、デジタル雪まつり新聞で速報した「国際雪像コンクール」をWebでさらに詳しく速報しました。

<http://www.aurora-net.or.jp/snowfes/99/inter/>

今回の取り組みに対して、さっぽろ雪まつり実行委員会の方々もインターネットの波及効果を痛感した様子で、来年に向けてどんどん新しいことをやっていきたいと意欲的でした。ってことは来年も働く...かぁ。

4月より「シスコ・ネットワーキング・アカデミープログラム」開講

道都大学短期大学部 経営科 専任講師 由水 伸

昨年、1998年12月22日に道都大学短大部と日本シスコシステムズ株式会社との間で、1999年4月より「シスコ・ネットワーキング・アカデミー・プログラム」の授業を開始するための契約調印式が行われました。すでに新聞記事などでご存知の方も多いと思います。

「シスコ・ネットワーキング・アカデミー・プログラム」は、インターネットの普及とともに急速にネットワーク技術者の不足が起こりつつある中で、21世紀に向けて必要となるネットワークの知識と技術スキルを専門の授業の中で教えるものです。本プログラムでは、世界最大手のネットワーク機材製造メーカーの米国シスコシステムズ社の膨大なノウハウを基に、卒業後即座にネットワーク関連の職に就けるよう、実務的な学習と経験を積むことを目指します。既に2年ほど前から全米50州の1000校を上回る高校、大学、技術専門学校などをはじめ、世界14カ国で開始されており、日本では昨年4月から参加希望校を募っていたもので、この4月には本学のほか、本州のいくつかの学校で講義が始まります。北海道の学校としては本短大が唯一名乗りを上げていました。

カリキュラムは主に経営科経営情報コースを主眼において展開します。4期、2年間の構成で、Webを使ったマルチメディア教材によるCAIのもとで、コンピュータやネットワーク技術を基本から学習します。その後、ルータやスイッチングハブなどのネットワーク機器を実際に使用して、ネットワークの設計と構築、管理に至るまでを修得します。そして、最終的にはシスコの技術者認定制度や各種資格取得にも取り組むこととなります。このプログラムを実践する事により得られるメリッ

トとして、学生に対してはコンピュータ系科目間の連携がはかられ、より統一的、効率的に学習が進められるようになり、その結果、学習到達度の向上と、卒業後の専門職への道が開けることとなります。また、本学としてもネットワーク技術の集積が行われ、その結果、独自性のあるネットワークの自由な構築・展開が可能になります。そして地域社会にとっては、第4セメスタに設定されている実務体験実習を利用することで、地域の学校や福祉団体へボランティアとしてネットワーク構築・メンテナンスの道も開かれています。ご存じのように、小中学校においても、2001年までに全国の学校にインターネット接続の方針が打ち出されました。その時までには少しでも役に立てるよう、十分な力を持った学生を育てておきます。人手が必要になった際は、お手伝いできると思いますので是非お声がけください。

なお、夏休みなどの時間を利用して、学校の教員向けの明るく楽しい講習会なども予定しています。その際はACEのみならず、是非ご参加ください。

マックワールド・エキスポに ACEブース登場！（続報）

事務局 青柳

明日（2/18）から千葉・幕張メッセにて開催される「MacWorld EXPO'99」に、昨年に引き続きACEブースが設けられることは前号でもお伝えしました。このブースでは「ポスター・セッション（ACEの広報を主に行う）」と「プレゼン・セッション（各支部の活動や実践内容を発表する）」を展開し、北海道支部は20日（土）最終日の10:30～14:00を担当します。ACEブースは「240」です。

プレゼン・セッションで北海道支部が発表する内容は以下の通りです。

1. ひらがな&ローマ字変換フィルター（富士通エンジニアリング・高本）
【12月研究会でお目見え、先日道新で紹介されて以来ブラッシュ・アップ中】
2. レイティング検索（標茶中・村田）
【全教師待望？のバッド・キーワード排除サーチエンジン。標茶町教委で運用中】
3. アメリカ視察ダイジェスト（道都短大・野口）
【1月の講演会で紹介したアメリカ西海岸の情報教育事情報告のダイジェスト】
4. VSF99報告（北星女子短大・武田）
【発寒小・高橋先生がオフ会議から制作までをまとめてくださったビデオで発表】
5. デジタル雪まつり新聞（吉田）
【苦難に満ちた1週間で作り上げたデジタル新聞をPDFファイルで紹介】

各項目20分程度、2クール繰り返します。

なお、プレゼン終了後14:00からはACE幹事会、18:00からは総会、続いて19:00からは懇親会が幕張プリンスホテルで行われます。懇親会へジョブズが・・・という噂はウワサで終わるかもしれないようですが、幹事会と総会で決まった事項については次号でまた報告します。

編集後記

実はですね。悩んでるんですよ。こういった悩みは久しぶりなのですが、いや実は「欲しいMacがない」んです。そう、これは2年前の春頃、まだCometと呼ばれるサブノート機の噂が出てない頃味わったのと同じ感覚です。こういうの、とって困るんです。確かに2400使ってますし、4GのHDDも入れてますけどこれG3ボード入れてどうのこうのと、とかとっととPowerBook G3 14inch液晶ドーンとかいろいろ考えるんですが、どれもイマイチ。この悩みを今回iCEOは解消してくれるのだろうか、それとも...。これを書いている17日夜の時点では何ともいえない状況です。（吉田）

1年の計は2月にあり。2、3年前からそう決めて、今年もやっぱり最も日にちの少ない月は最も忙しい月になりそうです。ところで今年の雪まつりは過去最高の人出だったとか。50回記念なんてことは知らなかった人も多いでしょうから、「参加型の企画を増やしたことが大きい」という開催者の見解も的を得ているのかも。VSFも新聞も「参加型企画」の象徴ともいえますよね。どうりで子ども達、楽しそうなわけだ。おじさん達はちょっとバテたかな・・・でも来年も懲りずにまたやるよ。（青柳）

VSFも無事に終了しました。子ども達も作る喜びとともに新しい出会いに感激したようです。先月に引き続き、秘湯巡りの後、こうして編集会議にはせ参じました。北海道の青少年野外活動教育施設の情報環境は相当改革されてきています。どの施設の方も熱心ですね。さて、次はいよいよ学校教育の番です。北海道の情報教育はACEの活動がますます重要になってきています。21世紀も本当に間近になってきました。近々のPOEM開催を目指して、ACE北海道支部の活動もそろそろまとめる時期かなと思います。みなさん、これからもがんばりましょう。さて、Expoに旅立つ荷造りでもするとしますか。（荒島）

明後日からマックワールドエキスポにいつてきまーす！

毎年、行きたいと思いつつもなかなかチャンスがなかったんで、とって楽しみでーす。（見澤）

パソコンとはいったい何なのか？計算する機械。いやコミュニケーションする道具。うんにゃ、自己表現の道具だ。などと言われてきました。でも、全部不十分なのです。ネットワークに接続されたパソコンは、「自己実現のための道具」なのです。なにかを求めて、サイバースペース空間を捜し求め、掴んだ何かをしっかりと発信する。それを通して誰かと交わり、語り合い、次の一步を歩み出す。ネットとパソコンそれは、「自己実現のための道具であり、「場」なのです。したら、あなたは、いったい何を実現するかね？ん？ぼくだったらかい？そうね～。ま、焼き芋でも食って考えてみるわ・・・（武田）

教育とコンピュータ利用研究会 北海道支部

1999年2月17日発行

事務局：〒060-8711 北海道札幌市中央区大通西3-6

北海道新聞社 情報開発本部内（担当：青柳・吉田）

TEL 011-210-5801 FAX 011-210-5532